

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370573

研究課題名(和文)古英語・中英語における迂言的表現 受動構文・完了・進行形・非人称

研究課題名(英文)Periphrastic Constructions in Old and Middle English

研究代表者

小倉 美知子(Ogura, Michiko)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：20128622

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、英語が形態的に1語では表わせない完了、未来、進行、受動等の構文を、助動詞を用いることで2語以上の表現方法を確立し、現在のような複雑な時制や態や様々なアスペクトを示すことができるようになった過程を、そのもととなる古英語・中英語の時代の文献から例証したことにある。形態的なambiguityを迂言的な手法で補うことにより、現代では「英語らしい」といえる表現法をすでに古英語の段階から発達させていった様子を、韻文、散文、行間注釈などの文献を綿密に調査することにより貴重な例を見出すことができたと自負している。

研究成果の概要(英文)：Periphrases are the expressions using more than two words instead of one. Old English lost so many morphologically distinct forms that it needed some device of using auxiliary verbs as well as subjunctive forms. In this study I have examined extant texts both prose and verse, including interlinear glosses, in Old and Middle English periods, in order to show how English developed these periphrastic constructions in expressing perfect and future tenses, passive voice, progressive aspect, reflexive and 'impersonal' constructions in contrast with simple, personal constructions, in medieval period. Instead of using computer corpora, I have used my hands and eyes to investigate texts and contexts, sometimes going back to manuscripts, and have found earlier examples than had been found so far in previous studies and, as a result, have explained the process of the development of these periphrases as typical features of the English language.

研究分野：中世英語学

キーワード：迂言用法 古英語 中英語 再帰構文 非人称構文

1. 研究開始当初の背景

英語の迂言用法に対する関心はすでに 1986 年に非人称構文、1989 年に再帰構文の中世英語における調査を行った時から高かった。ゲルマン語派の言語として動詞の変化形が形態的には現在形と過去形しかなく、受動形は *hatte 'is/was called'* を除いては *be* 動詞 + 過去分詞を用いるしかなく、middle voice に当たる形は非人称と再帰構文を用いるしかない状況の古英語が、現在のように時制を確立し、論理的な表現を整えた言語に発展するためには、様々な助動詞を活用する必要があったことは認識されていたが、言語理論の立場をとる論文・著書は多いものの、文献学的に当時の資料に基づく詳細な研究が少ないのが現実であった。然るにこの数年間のうちに発達した computer corpora によって、実際の写本・ファクシミリ・刊本に寄らずとも、website からすでに収録され syntactic tag まで付けられた例文を活用して大量のデータを集め分析する論文が、理論の立場で登場し流行し始めた。しかし syntactic tag には様々な問題があり、例文の扱いも適切でないものが散見されるようになって、果たしてその数字やパーセンテージをどの程度信じられるものか疑問が生じると共に、現代の native speaker の古英語・中英語の理解度にも "modernisation" の傾向が強くなっていることが分かった。そのため、この迂言化という英語発達史における重要な現象を、文献学の立場から綿密に研究する必要性を感じた。

2. 研究の目的

およそ迂言用法に関係するすべての構文、すなわち *beon/habban* + 過去分詞 (完了形)、*beon/wesan* + 現在分詞 (進行形)、*beon/wesan/weorðan* + 過去分詞 (受動構文)、*man-periphrasis*, *onginnan/beginnan* + 不定詞 (*to begin*)、*uton* + 不定詞 (*hautative expression*)、法助動詞 + 不定詞、*double auxiliary*, *causative auxiliary*, *anticipatory don* 等の構文の中世英語における用法と発達・衰退・他表現への置換など、形態的欠如を補おうとした英語が現在の形に発達するに至った経緯を、韻文・散文・行間注釈、中英語における方言差など、あらゆる角度から調査した。

3. 研究の方法

当然、OED, MED, DOE, Bosworth-Toller (and Supplement), HTOED などの基本的な辞書に収録されている例から調査する。Computer corpora 一辺倒な調査は受け入れられないが、辞書のほとんどがデジタル化されている今日では、使わざるを得ない。しかしもともと人の手によって作られた Bosworth-Toller のような辞書に、かなり重要な例がすでに収録されているのも事実であるので、信頼のおけるものはすべて活用した。また、Mustanoja (1960), Visser

(1963-73), Mitchell (1985) などの文法書に挙げられている例文についてもすべてチェックしておいた。例によっては写本に戻る必要があるため、デジタル化されていない写本については渡英の際に British Library, Bodleian Library, University Library Cambridge 等において必要箇所の再調査を行った。そのうち、重要な文献については、ある程度の統計は必須であるため、構文の頻度、助動詞として用いられる動詞の種類、alternative expressions などを調べた。古英語においては詩と散文の違いを重要視すると共に、聖書や Bede のようにもとのラテン語との対応がはっきりしている文献については、ラテンの訳か古英語独自の構文かについても明らかにした。

4. 研究成果

(1) まず、完了形に関しては、自動詞の場合は *beon*, 他動詞の場合は *habban* を用いることは基本ではあるが、すでに *habban* が自動詞においても用いられていることは以前の論文で明らかにしている。今回の調査では、*beon/wesan* + 現在分詞の構文が進行形として古英語から用いられたかについて、かなりの時間を割いて調査した。その結果、動詞によっては (例えば *fight, live* の意味の動詞のように) *duration* を意味するところから進行形の要素を持ち、*Orosius, Anglo-Saxon Chronicle* と *Ælfric's Catholic Homilies* 等において、現代にも通ずるような例が見られるが、全体としては Mustanoja が言うように descriptive な色合いが強いのが古英語の間の使い方であると結論できた。また、未来に関しては *beon* の用法と共に、*sculan, willan, magan* の用法は、行間注釈でのラテンの訳に現われ、それ以外では *Cura Pastoralis* や Bede にわずかに見られるのみと言ってよい。

(2) 受動構文と同様に用いられることのある *man-periphrasis* は、行為者をはっきりさせない使い方 *Anglo-Saxon Chronicle* によく見られるが、古英語においてはテキストによって好まれた感がある。中英語にまで残ることになる *hatan > haten 'to be called'* の表現の variation については、*La3amon's Brut* と *Cursor Mundi* に多くの例が見られる。なお、*hatan* に関してはその多義性と多様性から、*causative auxiliary* との関連でも調査した。

(3) *Onginnan/beginnan* + 不定詞に関しては以前にも調査したが、今回は助動詞 *don* の発達と合わせての中英語での方言の問題と、迂言の *do* のもととなった *anticipatory don* の問題とを分けて調査した。その理由としては、すでに DOE で認めていたこの用法を OED においても起源の一つとして認める記述が加わったことにある。Visser が言及し、私が 2003 年に強調してから、古英語にも迂言の *do* があることを認めるまでかなりの

年月を要したのは興味深い。また、double auxiliary に関しては、東欧の研究者が私の論文を用いてくれており、英語のみならず他の言語にも起こりうる現象としてとらえていることも分かったので、成果をモノグラフにする際、最終的にもう少し例を付け加えたい。(4) 再帰構文については、人称代名詞と共に起る self の役割を調査することで、新しい例を複数発見することができた。人称代名詞のみの構文と self を伴う構文とは中世を通じて用いられているが、Chaucer においてはかなり使い分けがなされるようになる。しかし初期近代英語までは、どちらの構文も用いられている。非人称構文に関しては、人称表現が古英語から存在するものが多いのだが、理論言語の立場の著書で、著者が実際に見てはいない写本の年代に拘って人称表現への移行時期を遅らせたり、行間注釈の例はラテン語の訳であるとして認めないなどの記述がなされており、それを信じる傾向があるため、review 等により反論するところから始めた。古英語の与格が前置詞を取るようになる中英語ではその変化がはっきりするが、14 世紀の後半になっても前置詞の使用はまだ流動的であることを報告できる。

(5) 関係節の中に人称代名詞が残る構文は、古英語・中英語を通じて見られ、初期近代英語以降は従属節として現代英語的構文に統一されていく。このため correlative constructions を基本とする古英語から、現代の relative constructions へと変化していく過程を記述することに焦点を合わせた。

(6) 上記のような研究成果を現在 9 章の構成で執筆中であるが、12 章程度に増やして出版することも考えている。すでに 3 年前、ドイツの出版社から執筆依頼が来ているので、できるだけ早く結果をまとめてモノグラフを完成させる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

① Michiko Ogura, “Pronoun Retention in Old and Middle English Relative Clauses”, *Poetica* 87 (2017) 印刷中 査読有

② Michiko Ogura, “Binomials, Word Pairs and Variation as a Feature of Style in Old English Poetry”, in Joanna Kopaczyk and Hans Sauer (eds.), *Binomials in the History of English* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017), 63-81. 査読有

③ Michiko Ogura, “Borrowed or Translated? --- Acceptability of Christian Terms”, *Essays and Studies in British & American Literature* (東京女子大学『英米文学評論』), Vol. 63 (2017), pp. 81-94. 査読無

④ Michiko Ogura, “Compound Reflexive as a Metrical Filler, or *Self* in *Himself* as

an Alliterating Element?”, *Studies in English Literature*, English Number 58 (2016), 77-95. 査読有

⑤ Michiko Ogura, “OE *God*, *Hlaford* and *Drihten*”, *SELIM* (Journal of the Spanish Society for Medieval English Language and Literature) 21 (2016), 81-104. 査読有

⑥ Michiko Ogura, “Some Peculiar Forms of Old English Verbs”, *Studia Anglica Posnaniensia* 51/2 (2016), 31-44. 査読有

⑦ Michiko Ogura, “Stylistic Devices for Starting Direct Speech in Old English Poetry”, *Studies in Medieval English Language and Literature* 31 (2016), 1-19. 査読有

⑧ Michiko Ogura, “Word Pairs as Components of Variation in Old English Poetry”, *Colloquia* (Keio University), Vol. 35 (2014), 251-270. 招待論文

⑨ Michiko Ogura, “Two Syntactic Notes on Old English Grammar: (1) OE *beon/wesan* + present participle, (2) OE *standan* as a Copula”, in Michiko Ogura (ed.), *Aspects of Anglo-Saxon and Medieval England* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2014), 105-134. 査読有

⑩ Michiko Ogura, “Lexicalisation of Christianity, or Christianisation of the Anglo-Saxon Vocabulary”, in Ken Nakagawa et al (eds.), *Studies in Modern English: The Thirtieth Anniversary Publication of Modern English Association* (Tokyo: Eihosha, 2014), 85-100. 査読有

〔学会発表〕(計 10 件)

① Michiko Ogura, “Pronoun Retention in Old English”, IAUPE main conference at IES, King’s College, London, U. K., on 29 July 2016.

② Michiko Ogura, “Morphological Merger of Old English Verbs in the late OE Period”, IAUPE Medieval Symposium at Windsor (Cumberland Lodge), U. K., on 23 July 2016.

③ 小倉美知子、「*Self* の存在意義」(招待発表)日本英文学会 2016 年 5 月 28 日 京都大学(京都府京都市吉田)

④ 小倉美知子、「Late OE に見る古英語動詞の形態的統合」日本中世英語英文学会 2015 年 12 月 5 日 慶應義塾大学(東京都港区三田)

⑤ Michiko Ogura, “Pronoun Retention in Old and Middle English Relative Clauses”(招待発表)日本英語学会 2015 年 11 月 22 日 関西外国語大学(大阪府枚方市)

⑥ Michiko Ogura, “What Really Happened to ‘Impersonal’ and ‘Reflexive’ Constructions in Medieval English” Plenary paper in the 9th International

Conference on Middle English at Wrocław University, Poland, on 2 May 2015.

⑦ 小倉美知子、「詩行に挿入される会話 古英詩の場合」慶應義塾大学最終講義 2015年3月5日(東京都港区三田)

⑧ 小倉美知子、「中世英語の非人称構文・再帰構文の抵抗」日本中世英語英文学会 30周年記念大会 2014年12月6日 同志社大学(京都府京都市今出川)

⑨ Michiko Ogura, “Christianisation of Anglo-Saxon Lexemes” Old and Middle English Studies: Text and Sources (a joint international conference between the Institute of English Studies, University of London, and Keio University, Tokyo), at IES, London, U. K., on 4 September 2014.

⑩ Michiko Ogura, “Features of Word Pairs in Old English Poetry”, Workshop “Exploring binominals: History, structure, motivation and function” in the 18th International Conference on English Historical Linguistics at University of Leuven, Belgium, on 16 May 2014.

〔図書〕(計 2 件)

① 小倉美知子、『変化に重点を置いた英語史』英宝社 (単著) (2015年・iv+153 pp.)

② Michiko Ogura (ed.), *Aspects of Anglo-Saxon and Medieval England* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2014). (共著) (pp. 105-134)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

書評論文：

① Michiko Ogura, “What Really Happened to Impersonal Constructions in Medieval English”, *English Linguistics* 31.2 (2014), 622-657. Ruth Möhlig-Falke, *The*

Early English Impersonal Construction: An Analysis of Verbal and Constructional Meaning (Oxford University Press, 2012) に対する Review Article.

書評：

① Kazutomo Karasawa, *The Old English Metrical Calendar (Menologium)* (Cambridge: D. S. Brewer, 2015), reviewed by Michiko Ogura in *Studies in Medieval English Language and Literature* 32 (2017). 印刷中

② Ayumi Miura, *Middle English Verbs of Emotion and Impersonal Constructions* (Oxford University Press, 2015), reviewed by Michiko Ogura in *Studies in English Literature*, English number 58 (2016), 137-144.

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小倉美知子 (OGURA, Michiko)
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号：20128622

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()